

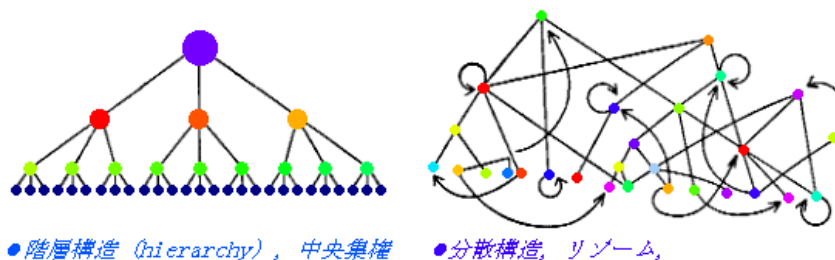
生涯学習の新しい展開 ネットワーク

イリイチ (Ivan Illich) の学校論 『脱学校の社会』(deschooling society)

イリイチがこの本で言っているのは、人が学校で学ぶのは、結局のところ、消費者としてモノや情報を無批判に受け入れる態度だけである、ということだ。学校こそが、消費社会を生んでいる元凶だ、という示唆が、いま読みかえしてみると、もっとも新鮮だった。この本が書かれた当時のアメリカは、ベトナム戦争の真っ最中、しかも、大衆消費社会が、日本に先駆けて、大規模に進行中だった。コカコーラを飲みながら、ベトコンを殺す、という、アメリカン・ウェイ・オブ・ライフへの疑問が、あらゆる局面で吹き出してきた時代だ。イリイチは、学校化ということ、ベトナム戦争についてもいう。ベトナム人に「民主主義を教える」ための戦争、つまり、学校化するための戦争だったとっているのだ。もちろん、戦争が終われば、コカコーラを売り込むつもりだったのだろう。

イリイチは、真の理解をはぐくむものは、学校という制度やカリキュラムではなく、相互共生的な (convivial=ともに生き生きする) 道具、たとえば電話網や郵便網、いまでいうBBS のようなコンピュータ通信網といったウェブ状の仕組みを通した、生き生きした他者との交わりだといっている。ここですでにウェブという概念が、1971年に書かれた本の中でイリイチによっていわれているのだ。プログラムからプロトコルへ、つまり、計画から手続きへ、というインターネットを準備した思想がすでにここにある

イワン・イリイチの用語"conviviality" (「みんなで一緒にいきいき楽しい」というニュアンス) とコンヴィヴィアルな道具としてのネットワークであるインターネットという考え方、そして同書で展開されているインターネットの捉え方は、今後のインターネットのひとつの可能性を示唆しているといえよう



イリイチ = すぐれた教育制度の3つの目的

第一は、

誰でも学習をしようと思えば、それが若いときであろうと年老いたときであろうと、人生のいついかなるときにおいてもそのために必要な手段や教材を利用できるようにしてやること、

第二は、

自分の知っていることを他の人と分かちあいたいと思うどんな人に対しても、その知識を彼から学びたいと思う他の人々を見つけ出せるようにしてやること、

第三は、

公衆に問題提起しようと思うすべての人々に対して、そのための機会を与えてやることである。

すぐれた教育制度の下では、本当に誰もが自由に論じ、自由に集会を持ち、自由に報道ができるようにし、またそれゆえにそれらのすべてが十分に役立つものとなるように近代的科学技術が用いられるべきである。

「コミュニケーションはコミュニティの成立基盤である。これまでは、それが物理的な環境に制約されていた。学校や会社、地域のコミュニティは存在していたが、それ以外のコミュニティに参加することはひじょうに難しい。そういった物理的、時間的な壁をいきなり取り払うのがインターネットである。組織の壁もなければ、国境もない。こうした新しい環境は、企業と企業、企業と消費者、企業と地域社会といったさまざまな間柄にも影響を及ぼさだろう。インターネットは企業と企業を結ぶものではない。個人と個人を結ぶものであり、コミュニティとコミュニティを結ぶものである。公害を垂れ流し、市民の存在を無視する企業には『力をもって対抗しよう』とした時代もあったが、いまやわれわれの手にはインターネットがあり、対話の道がある。企業と対話しようとしても、担当者は木で鼻をくくったような返答しかよこさないかもしれないが、さまざまな場所において、そこに勤務する個人との対話の機会を数多くもつことで、間接的にはあるが、企業の方針に影響を与えることができるのだ。」古瀬辛広、廣瀬克哉著『インターネットが変える世界』（岩波書店）

「カリキュラムは、どんなテーマでも単純化してしまう。それぞれのテーマの間に存在する多くのつながりを切り落としてしまい、そのテーマの内容の豊かさや本来の魅力をそぎ落とした順序正しい骨組みだけが残るのだ。（中略）さらに悪いことには、この教育システムは世界を『科目』に分けることができ、それぞれの科目がきちんと定義できるという態度を生徒に押しつける。また階層を下から支える『基本』とその上に積み上げられた『高度な考え』というのがあって、後者はあとから学ばねばならないという考えを受け付けているのだ。人々の知性の息吹きを破壊したり、彼らがアイデアに没頭することや、考えたり、調査したり、仮説を立てたり興味をもったりするのを妨げるように、これほどうまく設計されたものは他にはないと言えるだろう。（テッド・テルソン「リテラシーマシン ハイパーテキスト原論」）

知の分散化「分かちもたれた知性」

ロイ・D・ピーはこの「知の分散化」を「分かちもたれた知性 (distributed-intelligence)」という言葉で表している。この「分かちもたれた知性」とは、先に述べた知の分散化を、人間の「知能」あるいは「能力」の再定義のために援用しようとするものである。つまり個人の能力を分け与える (distributed) ことから新しい教育と評価のありようを考えていこうとするものである。